

三人称過去形の語りの構造について

—Henry James の “*The Bench of Desolation*” を中心に—

A Study of the Narrative Discourse of Henry James's “The Bench of Desolation”

李 春 喜

LEE Haruki

Narrative discourse does not always tell the reader the story in the order in which the events of the story happen. Some stories begin with the death of a character and go back to the process of his death, or some narrative pieces tell the reader events in advance which will happen later in the course of the story.

Some pieces of the narrative reflect the narrator's ideas, thoughts or feelings whereas some reflect a character's ideas or thoughts. The reader has to discern between which source of information is from the narrator and which source is from the character.

Some information conveyed by a narrator in a story is a fact that the reader has to accept at face value, otherwise we cannot follow the story, but some information is a subjective opinion of a character, the validity of which the reader should reserve his or her judgment.

In this article, I described how the narrative discourse of Henry James's “The Bench of Desolation” is structured in terms of time and focalization and how the structure of the story contributes to the effects on the reader when he or she reads it.

キーワード

ヘンリー・ジェイムズ (Henry James)、「荒涼のベンチ」 (“The Bench of Desolation”)、物語言説 (narrative discourse)

Gérard Genette は *Narrative Discourse* において、物語を物語言説・物語内容・語りの3つの領域に分け、物語の構造的な分析を試みている。

Genette は物語言説を “the narrative statement, the oral or written discourse that undertakes to tell of an event or a series of events” (25) と定義し、物語内容を “the succession of events, real or fictitious, that are the subjects of this discourse, and to their several relations of linking, opposition, repetition, etc.” (25) と定義する。そして語りとは “the event that consists of someone recounting something: the act of narrating taken in itself” (26)だと述べている。

物語言説は必ずしも出来事をそれが発生した順序で語るわけではない。ある事件の渦中にい

る登場人物が、その事件に巻き込まれるに至った過程を後で報告する物語は数多く存在するし、例えば推理小説なら、事件が起こってからその事件が起こった経緯が語られたり、死体の発見から始まった物語が、殺人がいかに行なわれたかを説明するために、事件の始めへと遡って終わることがよくある。

Genette は、物語言説が伝える出来事の発生順序と物語内容として発生した出来事の順序との関係について、物語世界において前に起こった出来事をテキストが後から提示する後説法 (analepsis) と、まだ起こっていない出来事を先に提示してしまう先説法 (prolepsis)、時間軸上どこに位置付けていいかわからない空説法 (achrony)、出来事を発生順序とは無関係に寄せ集めて提示する共説法 (syllepsis) とに分類し、出来事が発生した順序とそれらが報告される順序の不一致を錯時法 (anachrony) として整理している¹⁾。

さらに物語内容と語りの順序との関係を「後置的なタイプ」(subsequent)、「前置的なタイプ」(prior)、「同時的なタイプ」(simultaneous)、「挿入的なタイプ」(interpolated)の四つに分類している²⁾。「後置的なタイプ」とは過去形で語られた物語のことで、出来事が発生した後、その出来事を過去の出来事として語る物語言説である。ほとんどの物語がこのタイプの語りの形式を採用している。「前置的なタイプ」は予報的な語りのタイプである。未来形で語られるのが普通であるが、現在形で語られる場合もある。「同時的なタイプ」は物語世界の出来事の発生と同時に語られる物語で、ニュースの実況中継などはこのタイプの語りに属する。「挿入的なタイプ」は、ある物語が語られている最中に他の物語が語られるような物語で、いわゆる書簡体小説がこれにあたる。

ところで、Henry James の “The Bench of Desolation” は以下のような書き出しで始まる。

She had practically, he believed, conveyed the intimation, the horrid, brutal menace, in the course of their last dreadful conversation, when, for whatever was left him of pluck or confidence — confidence in what he would fain have called a little more aggressively the strength of his position — he had judged best not to take it up. (369)

“in the course of their last dreadful conversation” という物語言説から明らかであるように、物語世界の出来事としてはこの冒頭の物語言説が伝えている事柄よりも以前に発生した物語内容があることがわかる。物語の冒頭にある言説が物語内容としてそれよりも以前に発生した出来事について語っているのでここでは後説法が用いられていることになる。また、この物語言説はほとんどの物語がそうであるように、物語世界の出来事が発生した後でその出来事について語っているので後置的な語りの形式を採用していることになる。後置的な三人称の語りの特徴は A. A. Mendilow が *Time and the Novel* で指摘しているように、その言説が報告している出来事があたかも現在起っている出来事であるかのような印象を読者に与えることができることである。

There is a vital difference between writing a story forward from the past, as in the third person novel, and writing one backward from the present, as in the first person novel. Though both are equally written in the past, in the former the illusion is created that the action is taking place; in the latter, the action is felt as having taken place. (106-7)

James の “The Bench of Desolation” は、交際していた女性から婚約不履行で訴えられた主人公が、賠償金の支払いのために貧しい生活を強いられるが、数年後その女性と再会し、彼の賠償金を元手に増やした金を逆に彼女から提供され、その金を受け取るという物語である。

この小説は6章から構成されており、第1章は、主人公である Herbert Dodd の Kate Cookham との婚約解消の2度目の交渉についての印象から始まっている。その後、彼が今の職業につくに至った過去の経緯や、彼と Kate Cookham との出会いが彼女が彼の店に客として来たことがきっかけであることが語られる。次に、婚約不履行で賠償金を支払わなければならなくなった主人公の惨めな現状が語られ、Kate Cookham との二度目の交渉の日の夕方、彼が一人陰鬱な時間を過ごしたことが描かれる。

第2章では主人公の Herbert Dodd が Nan Drury という女性と交際していることが語られる。しかも、Herbert Dodd が Kate Cookham に婚約不履行で訴えられていることを Nan Drury に話しているという事実から、読者には彼が Kate Cookham と2度目の話し合いに臨んでいる時点で既に Nan と交際しているということがわかる。彼は Kate Cookham に400ポンドの賠償金を払うことで決着したと Nan Drury に話す。ここで読者は、Herbert Dodd が Nan のことを知ったのは彼が Kate Cookham に婚約解消の手紙を出してからであるという物語言説や、Dodd が Cookham と Bill Frankle が駅から一緒に出てきたのを目撃したという物語言説に出会う。

第3章では、Herbert Dodd が Cookham に支払った賠償金のために Dodd と Nan の生活が惨めなものであったことが描かれている。二人は結婚し二人の子供をもうけるが、二人の子供も Nan も死んでしまったこと、主人公と Nan との結婚生活が不幸なものであったことが描かれ、Nan が死んで12年経った今彼はガス会社で働いていることがわかる。

第4章は主人公と Kate Cookham との再会の場面である。妻が死んで12年以上経った10月の土曜日の午後、いつもの散歩にやって来るベンチで彼はかつての婚約者 Kate Cookham に再会する。そこで彼は彼女から彼女が滞在しているホテルにお茶に来よう招待される。

第5章は、Herbert Dodd が Kate Cookham に再会した翌日、彼が Cookham の滞在しているホテルを訪れる場面である。そこで彼は、Kate Cookham が彼の賠償金を元手に増やした金を彼に提供するために彼に会いに来たことを知り、彼女がそもそも彼に賠償金を請求したのは、最初からその金で彼の世話をすることが目的だったと知らされる。

第6章では Dodd が Cookham のホテルを訪れてからどのように過ごしたかが描かれ、一週

間後、彼は彼女と再会したベンチで再び Cookham と会い、彼女が差し出した金を受け取る。

以上がこの物語の物語言説によって語られる物語の順序であるが、この物語を物語内容における出来事の発生順序に並べるとおおよそ次のようになるとと思われる。

Herbert Dodd は母方の伯父から譲り受けた古本屋を営む。自分の店に客として来た Kate Cookham と出会い、Kate Cookham との交際が始まる。Dodd は Cookham と婚約をする。Cookham が Frankle と一緒にいるところを Dodd が目撃する。Dodd は婚約を解消しようとする。Dodd は Nan と出会い、Nan との交際が始まる。Cookham との婚約解消について Dodd と Cookham との間に2回の交渉がある。Dodd と Cookham との間の婚約解消が成立する。Dodd と Nan は結婚をする。子供が二人生まれるがどちらも死んでしまう。続いて Nan も死ぬ。数年後のある10月、Dodd は Cookham と再会する。翌日 Dodd は彼女の滞在しているホテルを訪れる。その一週間後 Dodd は再び Cookham に会い、彼女から金を受け取る。

ほとんどの物語がそうであるように、この物語も物語言説が伝える物語内容の順序と物語世界の出来事の発生順序とは一致しない。

ところで、この物語の物語言説と物語内容との時間の関係ではっきりしないのは、Herbert Dodd はいつ Cookham が Frankle と一緒にいるところを目撃し、いつ Nan に出会い、いつ Kate Cookham に婚約解消の手紙を出したのかということである。Dodd は Cookham が先に別の男性に心変わりをしたので Cookham に対して婚約解消の手紙を出したと主張しているが、Cookham の言い分は、Dodd がまだ彼女と婚約関係にある間に Nan と出会い交際を始めたということである。Dodd は本当に Cookham との婚約解消の意思を伝えるまで Nan と出会わなかったのだろうか。

この作品の物語言説を読む限り、Herbert Dodd が本当に Kate Cookham に婚約解消の手紙を出した後 Nan Drury と交際を始めたのか、彼は Kate Cookham に婚約解消の意思を伝える前に既に Nan Drury と交際を始めていたのかということがわからない。先の Genette の言葉を引用すると、Herbert Dodd がいつ Kate Cookham に婚約解消の意思を伝え、いつ Nan Drury との交際を始めたのかという時間的な位置が「空説法」になっているのである。

確かに、第2章で読者は

...his [Dodd's] own great insistence and contention being that she [Nan] hadn't in the least entered there [Dodd's life] till his mind was wholly made up to eliminate his other friend [Cookham]. (379)

He [Dodd] hadn't so much as heard of his true beauty's existence[Nan]...till days and days, ever so many, upon his honour, after he had struck for freedom by his great first backing-out letter... (380)

という物語言説に出会う。つまり、Dodd は Cookham との関係が終わるまで Nan Drury のことを知らなかったというわけである。さらに、この物語では、“He was to remember afterward

how he had wondered...”(「後になって彼は…と思い出した」)(371)、“he was afterward to think of her...”(「後になって彼は彼女のことを…と思った」)(383)という物語言説が示しているように、語り手は主人公が物語世界の出来事が発生した後でその出来事を回顧していることも語っているわけであるから、Herbert DoddがいつNanと出会い、いつKate Cookhamに婚約解消の意思を示したのかを客観的な情報として正確に語ることができたはずである。にもかかわらず、この物語の物語言説ではその点が曖昧である。なぜ曖昧になるのか。

ここでJamesの“The Bench of Desolation”の物語言説をHemingwayの“Cat in the Rain”の物語言説と比べてみよう。Hemingwayの“Cat in the Rain”は次のような書き出しで始まる。

There were only two Americans stopping at the hotel. They did not know any of the people they passed on the stairs on their way to and from their room. Their room was on the second floor facing the sea. It also faced the public garden and the war monument. There were big palms and green benches in the public garden. In the good weather there was always an artist with his easel. Artists liked the way the palms grew and the bright colors of the hotels facing the gardens and the sea. (129)

次に“The Bench of Desolation”の冒頭の文章を再度引用する。

She had practically, he believed, conveyed the intimation, the horrid, brutal menace, in the course of their last dreadful conversation, when, for whatever was left him of pluck or confidence — confidence in what he would fain have called a little more aggressively the strength of his position — he had judged best not to take it up. But this time there was no question of not understanding, or of pretending he didn't; the ugly, the awful words, ruthlessly formed by her lips, were like the fingers of a hand that she might have thrust into her pocket for extraction of the monstrous object that would serve best for — what should he call it? — a gage of battle. (369)

一読して明らかであるように、どちらの物語言説も三人称の過去形で書かれている。つまり、どちらの物語言説も登場人物ではない語り手によって語られ、物語世界の出来事が発生した後でそれについて語られる後置的な語りのタイプである。

しかし、Hemingwayの“Cat in the Rain”の場合、読者は、二人のアメリカ人がホテルに滞在しており、彼らはそこで出会う人を誰も知らないこと、彼らの部屋が二階にあり海と公園と戦争の記念碑に面していること、そしてその公園には大きなやしの木と緑色のベンチがあることなど、そこで語られていることを事実として受け入れる。読者にはこれらの事実を疑う理由がない。もしここで語られていることが嘘であったり間違いであったりすると読書行為そのものが成立しない。

一方、Jamesの“The Bench of Desolation”では、“Cat in the Rain”の場合とは違って、そ

こで報告されているのは「彼女は恐ろしく残酷な威嚇の意図を伝えていた」(“She had practically, he believed, conveyed the intimation, the horrid, brutal menace”) だとか「彼女の口から発せられる醜く恐ろしい言葉は何か恐ろしい物体を取り出すためにポケットに突っ込んだ手の指のようだった」(“the ugly, the awful words, ruthlessly formed by her lips, were like the fingers of a hand that she might have thrust into her pocket for extraction of the monstrous object”) のように登場人物が感じたり考えたりしたことである。つまり、登場人物が語り手ではないという点ではこの作品も Hemingway の作品と同じであるが、物語言説の視点が登場人物に焦点化³⁾されているという点で、この作品は Hemingway の作品と異なっている。“Cat in the Rain”では物理的的事実が描写されているにすぎないが、“The Bench of Desolation”では登場人物の内面の思考や感情が描かれている。とすれば、そこで伝えられている情報は必ずしも Hemingway の作品の物語言説のように客観的事実ということにはならない。なぜなら、人は間違いも犯すし嘘もつくからである。

しかし、Hemingway の“Cat in the Rain”の場合、そこで伝えられる情報を事実として受け入れないわけにはいかない。“Cat in the Rain”の物語言説は語り手による事実についての報告であり、その物語言説は登場人物の誰かに焦点化されているのではない。その物語言説にはその物語世界に偶然居合わせた者なら誰にでも語れるような情報しか報告されていないのである。登場人物の内面といった主観的な情報は報告されていない。Hemingway の語りのスタイルがしばしば新聞記者のそれに比べられるのは Hemingway ができるだけ登場人物の内面に立ち入らずに事物の客観描写でのみ物語を語ろうとしたからである。従って読者はそこで報告されていることを客観的事実として受け入れる。

フランスの言語学者 Emile Benveniste は“The Correlation of Tense in the French Verb”において、「歴史 (history) の体系」と「話 (discourse) の体系」という二つの体系を提出する。「歴史の体系」とはフランス語においては単純過去が中心となった物語言説で、「話の体系」とは動詞の複合過去形が中心となった物語言説である。「歴史の体系」は過去の出来事の物的な記述であり、この体系ではあたかも語り手が不在であるかのように物語が語られる。この体系の語り手は物語の結末まで知っていて、あたかも神のような視点を持ってすべてを過去の出来事として記述する。ここでは、登場人物は三人称で客観的に描かれ、“here” “now”のように物語世界と語りの時間・場所との関係を明示するような指呼詞は使用されない。つまり、「歴史の体系」で語られる出来事は過去に起こった事実として記録されるというわけである。Benveniste は次のように述べている。

これ〔歴史の体系〕は、物語のなかに話し手が全く介入することなく、ある時点に生じた事実を提示するものである。それらの事実は、起こったこととして記録されるかぎり、過去に属するはずである。おそらく、これらの事実が歴史の時称表現において記録され、言い表されるそのときから過去のこととしての特性を与えられる、という方がより適切

であろう。(219)

そして「歴史の体系」の例として Balzac の *Études philosophiques: Gambara* からその一部を引用している。

歩廊を一廻りしてから、若者は空と時計をかわるがわる眺め、いらいらした身振りをし、煙草店に入り、そこで葉巻に火をつけて、鏡の前でポーズをとり、それから自分の服装に視線を走らせた、がそれはフランスで趣味のきまりからみて許されるものよりは少々派手なものだった。かれはカラーと黒ビロードのチョッキの工合いを直した、がそのチョッキの上には、例のジェノア製の太い金鎖が幾重にも巻き付けてあった。それから、さっと左肩に、しゃれたひだの付いたビロード裏のマントをひっかけて、町の女たちの色目をうけとめながら、それには気をそらさずに、散歩をつづけた。… (222)

さらに Benveniste は「歴史の体系」について次のように述べている。

もはやこのときは語り手さえ存在していない。出来事は、それが歴史の視界に現われるにつれて生じたものとして提示される。ここにはだれ一人話すものはいないのであって、出来事自身がみずから物語るかのようである。(223)

一方、「話の体系」では、フランス語では話し言葉の過去形である複合過去形が用いられ、“here” “now” に代表される指呼詞が使用される。「話の体系」では、物語世界を語りの時間・空間に結び付ける語り手の存在が意識される。つまり、「歴史の体系」では第三者的な三人称を用いることで語り手が物語のなかから消失し、物語を語るものがあたかも誰もいないかのように物語が語られるのであるが、「話の体系」では、たとえ三人称で語られていても、読者を否応なしに物語世界に引き込む語り手の存在が強く感じられずには得ないのである。「話の体系」は語り手が読者に何らかの影響を与えようとする意図が前提となった物語であり、語り手が読者を取り込み、語り手の意識を読者に共有させるのである。「話の体系」について Benveniste は次のように述べている。

話というものは、そのもっとも広い意味において、すなわち話し手と聞き手とを想定し、しかも前者においてなんらかの仕方で後者に影響を与えようとする意図のあるあらゆる言表行為として理解される必要がある。…要するに、だれかがだれかに話しかけ、話してとして言表し、自分の言うことを人称の範疇において組織する場合のあらゆるジャンルを含む。(223)

例えば、Hemingway の “Cat in the Rain” の物語言説には “now” という時間を表す指呼詞は出てこないが、James の “The Bench of Desolation” では、冒頭に続く物語言説において、

There *she* was, in all the grossness of her native indelicacy, in all her essential excess of will and destitution of scruple; and it was the woman capable of that ignoble threat who, his sharper sense of her quality having become so quite deterrent, was now making for him a crime of it that he shouldn't wish to tie himself to her for life.

[下線部筆者] (369)

というように、全体が過去形で語られているにもかかわらず、“now”という指呼詞が用いられている。つまり、“The Bench of Desolation”の物語言説は、単なる過去の事実についての報告ではなく、物語世界の出来事について語る語り手の認識を読者に共有させる語りの形式だといえる。

ここで Hemingway と James の物語言説をもう一つ別の物語言説と比較してみよう。以下に引用するのは Mark Twain の *The Adventure of Huckleberry Finn* の冒頭部分である。

You don't know about me, without you have read a book by the name of *The Adventure of Tom Sawyer*, but that ain't no matter. That book was made by Mr Mark Twain, and he told the truth, mainly. There was things which he stretched, but mainly he told the truth. That is nothing. I never seen anybody but lied, one time or another, without it was Aunt Polly, or the widow, or maybe Mary. Aunt Polly —— Tom's Aunt Polly she is —— and Mary, and the Widow Douglas, is all told about in that book —— which is mostly a true book; with some stretchers, as I said before.
(49)

この物語言説では、Hemingway の“Cat in the Rain”や James の“The Bench of Desolation”と違って、物語を語っているのは登場人物である。そして、物語言説の視点はこの物語を語っている登場人物に焦点化されている。ここで用いられている言葉使いはこの物語を語っている登場人物が実際に用いるであろう言葉使いである。つまり、物語の登場人物でもありかつ物語の語り手でもある人物が自分の言葉で自分の物語を語っているわけである。このような物語言説の場合、読者はそこで語られている物語内容を一旦事実として受け入れるが、この物語の語り手が登場人物であることがはっきりしているのも、読者はこの語り手が嘘をいったり間違ったりする可能性を常に念頭におきながら物語を読むはずである。*Huckleberry Finn* の場合、嘘や間違いをいう可能性のある生身の人間に語られていることがはっきりしているのも、読者はそこで語られていることを100パーセント信じるわけではない。しかし、私たちが新聞の記事を読むときそこに書かれていることを疑わないのと同じように、Hemingway の作品を読むとき読者はそこで語られていることを疑わない。これは単に形式の違いにとどまらない。“The Bench of Desolation”の

...his [Dodd's] own great insistence and contention being that she [Nan] hadn't in the least entered there [Dodd's life] till his mind was wholly made up to eliminate his other friend [Cookham]. (379)

He [Dodd] hadn't so much as heard of his true beauty's existence [Nan]...till days and days, ever so many, upon his honour, after he had struck for freedom by his great first backing-out letter... (380)

という物語言説は、文字通りには「Herbert Dodd は Kate Cookham との関係を終えてから Nan Drury に出会った」ということを報告しているけれども、ここで報告される情報は必ずしも事実ではない可能性がある。なぜならこれは登場人物の主観的な認識を報告しているにすぎないからだ。複数の女性との関係を問題にされている男性が自ら「自分は不誠実なことはしていない」と発言しても、私たちはどれくらいその男性のことを信じるだろうか。人は自分にとって不都合な情報を隠したり偽ったりするものだ。

もしこれと同じ情報が Hemingway の“Cat in the Rain”の場合のように登場人物に焦点化されていない客観的な語り手によって報告されていたら、あるいは、Benveniste の用語を使うと、「歴史の体系」によって書かれていたら、Dodd が Nan に出会ったのは Cookham との婚約を解消してからだという報告を読者は客観的事実として受け入れたであろうし、Mark Twain の *Huckleberry Finn* のように明らかに登場人物の言葉で語られていたら、その発言の信憑性にはもう少しはっきりとした留保をしたはずである。しかし、いずれの場合も“The Bench of Desolation”は面白くも何ともない物語になってしまっていただろう。

“The Bench of Desolation”の物語言説は Hemingway の短篇に見られる客観的な報告をする語りの性質と、*Huckleberry Finn* に見られる明らかに主観的な報告をする語りの性質が混在しているため、主人公の主観的な認識を語っているにすぎない物語言説を読者はあたかも客観的な事実の報告であるかのように読んでしまう。“The Bench of Desolation”の物語言説を額面通り受け取る限り、Herbert Dodd がいつ Kate Cookham に婚約解消の意思を伝え、いつ Nan Drury との交際を始めたかということは問題にならない。なぜなら読者は「Kate Cookham を自分の心から追い出すまで Nan が自分の生活に入ってきたことはない」(“...his[Dodd's] own great insistence and contention being that she [Nan] hadn't in the least entered there [Dodd's life] till his mind was wholly made up to eliminate his other friend [Cookham] ”)、
「婚約解消の手紙を出すまで Nan のように美しい女性がいることを聞いたこともない」(“He [Dodd] hadn't so much as heard of his true beauty's existence [Nan] ...till days and days, ever so many, upon his honour, after he had struck for freedom by his great first backing-out letter...”))という物語言説に出会うからである。しかし、もしこれが事実だとしたら、なぜ Herbert Dodd は妻と子供たちに貧しい生活を強いることになることを知りつつ賠償金を支払うことに同意したのだろうか。自らに非のないことを訴訟に持ち込まれ、賠償金まで支払うことに同意するのは明らかに不自然である。物語言説のどこにも明示されていないけれども、Herbert Dodd は語り手が報告する内容とは違って、Kate Cookham の主張する通り、物語世界の出来事の順序としては Kate Cookham に婚約解消の意思を伝える前に Nan Drury と交際を始めていたと解釈するのが自然ではないだろうか。

同じ事は冒頭の Kate Cookham の描写についてもいえる。この物語の冒頭読者は Kate Cookham がいかに恐ろしい女性であるかを印象づけるような物語言説に頻繁に出会うが、実は

Kate Cookham はそこで描かれているような酷い女性ではないかもしれない。事実、物語の最後で Cookham は Dodd のために長年にわたって苦労して作った多額の金を Dodd に提供するのである。そして、Dodd に賠償金を請求したのは最初から Dodd のためを思っていたことだという。もちろん Cookham のこの発言は Dodd との会話の中で明らかにされたことなので、読者がこの発言を信じなければならない理由はない。物語言説が明示している通り Cookham は卑劣で恐ろしい女性だと考え、Dodd が Nan に出会ったのも Cookham に婚約解消の手紙を出した後だと読んでもよい。しかし物語言説が語る言葉を額面通り受け取ってこの物語を読めば、この語りの形式を選んだことによって得られる効果は半減する。この物語は、自分の嘘には一切触れず、自分の都合のいいように物事を解釈し報告している男の物語と読む方が、この語りの形式がもたらす効果をより一層巧みに物語内容に反映させることができるのである。Herbert Dodd とは Cookham と婚約中であるにもかかわらず Nan Drury と交際を始める不誠実な男である一方、Kate Cookham とは物語言説が報告するような恐ろしい女性ではなく、見返りを求めない愛を自分の愛した相手に注ぐことのできる思いやりのある女性ではなかっただろうか。

この物語の特徴は、物語言説が登場人物である主人公に焦点化されているにもかかわらず、焦点化されている人物が語り手ではないため、物語言説が伝える情報が語り手の伝える信頼できる情報なのか、それとも、虚偽の報告をする可能性のある人物から発せられる情報なのかははっきりしない点にある。同じ出来事を素材にしてもそれをどのような物語言説で語るかによって異なった物語内容が生まれる。その意味で James の“The Bench of Desolation”は、物語内容についての解釈が語りの構造に大きく左右される極めて技巧的な作品だといえる。

注

- 1) 詳しくは、Gérard Genette, *Narrative Discourse*, pp. 33-85参照。
- 2) 詳しくは、Gérard Genette, *Narrative Discourse*, pp. 215-27参照。
- 3) Genette は *Narrative Discourse* の「叙法」の章で次のように述べ、文学批評の分野で伝統的に「視点」と呼ばれてきたものに代る用語として「焦点化」という用語を提案している。

“To avoid the too specifically visual connotations of the terms, *vision*, *field*, and *point of view*, I will take up here the slightly more abstract term *focalization* which corresponds, besides, to Brooks and Warren’s expression, ‘focus of narration.’ (189)

引証文献

- Genette, Gérard. *Narrative Discourse*. New York: Cornell University Press, 1980.
- Hemingway, Ernest. “Cat in the Rain.” *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*. New York: Simon & Schuster Ltd., 1987. 129-31.
- James, Henry. “The Bench of Desolation.” *The Complete Tales of Henry James*. Vol. 12. Ed.

三人称過去形の語りの構造について（李）

with Introduction by Leon Edel. London: Hart-Davis, 1964. 369-425.

Mendilow, A.A. *Time and the Novel*. New York: Peter Nevill Ltd., 1952.

Twain, Mark. *The Adventure of Huckleberry Finn*. 1884. Harmondsworth: Penguin Books, 1966.

バンヴェニスト, エミール. 「フランス語動詞における時称の関係」『一般言語学の諸問題』 岸本通夫監訳 東京：みすず書房, 1983. 217-33.